

活用する力を高める研究協議会を開催しました

5月20日(火)、21日(水)、27日(火)、29日(木)の4日間にわたり、「活用する力を高める研究協議会」を開催しました。全国学力・学習状況調査問題を実際に作成された5名の学力調査官の講話や、事例発表、グループ協議が行われ、「活用する力を育む授業づくり」「全国学力・学習状況調査及びやまぐち学習支援プログラムの活用法」などについて理解を深めることができました。

調査官の熱い思い

5名の調査官に共通して言えることは、「目の前の子どもに学力を付けさせたい」「悩んだり苦しんだりしている子どもたちに自信を付けさせたい」「先生方に授業改善によって魅力ある教育を進めていただきたい」という強い思いをもっておられることです。

教科や質問紙の調査の結果を分析して子どもたちの現状を理解したり、問題そのものをアレンジして授業の題材に使ったりするなど、子どもたちのために指導の改善を進めましょう。

小学校 国語

学力調査の問題を活用して校内研修の活性化や授業改善を進めましょう

樺山調査官からは、多くの示唆をいただきました。

読解力の捉え直し

例えば読解力についてです。少し前までは、児童の読解力が低下したと嘆く声や、問題が難しいと指摘する声がたくさんあったそうです。しかし、本当に大切なことは、教員自身が、現在求められている学力について、どのような認識をもっているかということです。

全国学力・学習状況調査では、図や表などのいわゆる「非連続型テキスト」を目的をもって読む力や、ある程度の量の文章を段取りよく読み主旨を理解する力が求められています。こうした力を付けさせるためには、授業改善が何より大切です。

授業改善の視点

「読む目的が不明確なまま、場面や段落を輪切りにして与えていないか」「図や表などの様々なテキストを読むこと



に力を入れているか」「読みの絶対量が足りないのではないか」「調査問題を読むスピードが遅いのは、子どもたちに読む段取りをさせていないからではないか」「単元を貫く言語活動を設定しても、その特徴が十分理解されていないのではないか」など、授業改善の視点を取り入れた授業づくりが求められているというメッセージをいただきました。全国学力・学習状況調査の結果から、目の前の子どもたちがどのような状態かをしっかり把握し、教員自身が付けたい力を明確にした授業を作り上げていきましょう。

他にもたくさんの授業改善のポイントについて、紹介していただきました。全ての教科、指導場面にあてはまるものであり、私たちの日々の教育活動を見直す大切な視点となりました。

授業改善のポイント例

- 単元を貫く言語活動・課題解決学習を設定するなどして、目的をもたせた学びを展開しているか。
- 学習内容のモデルや手引きを示し、何を学んでいるか、授業中に明らかにしているか。

小学校 算数

研修課題を焦点化して、全教員で課題解決に取り組みましょう

磯部調査官からは、今回の調査で明らかになった課題の残る問題への指導の進め方について説明がありました。

例えば、A問題では白いテープの長さをもとにして赤いテープと青いテープの長さを比べる問題、B問題では親指と人差し指の幅から使いやすい箸の長さを求める問題など、演算決定や割合について出題されています。どうしてそのような計算の仕方になるのかを説明したり、式が表す関係を図にかいたりするなどして、計算の技能と意味の理解がともに図られるよう、学校が1つのチームとなって指導改善に取り組むことが大切だと述べられました。

算数の学習内容の系統性に関する研修

算数は指導内容が明確であるため、その系統性をとらえる研修が大切です。例えば「割合」の指導にあたっては、割り算の意味や小数の概念などいろいろな要素が考えられます。このため、かけ算や割り算などの計算の意味を全教員で系統的に指導していくための研修を積み、授業改善につなげていかなければならないと述べられました。

また、各校で一番に取り組まなければならない課題に対して、研修の焦点化を図り、研修内容に軽重を付けて全員で徹底して取り組むことの大切さについて述べられました。



学ぶ目的を明らかにした授業づくりで、言語活動を活性化しましょう

杉本調査官からは、山口県の先生方の日々の積み重ねが、児童生徒の学力につながっていることを評価していただき、その上で、「質の高い言語活動のある授業づくり」についてアドバイスをいただきました。

「授業の流れの中で学習の必然性をもたせることが大切です。何のためにやっているのか、それは何の役に立つのかを教員のみではなく、生徒が意識できるような授業づくりを行っていますか」という指摘が印象的でした。

例えば、国語の言語活動の例として、メモをとる、ワークシートを完成する、話し合うといった学習活動がありますが、それらの目的や内容が曖昧なままであれば、書く力の育成は難しくなります。

単元を貫く課題の設定例

「職場体験でお世話になった方へお礼の手紙を書こう」のように、言語活



動に必然性が生まれるように、「単元を貫く課題解決的な活動」を仕組むことが求められています。このような単元の中で、課題設定 → 取材 → 構成 → 記述 → 推敲 → 交流といった一連の流れを仕組み、言語活動に目的と具体性をもたせ、指導の要点を明らかにしましょう。

「教科独自の言語活動を大切にした授業づくりを進めよう

新井調査官からは、「教科独自の言語活動の大切さ」について教えていただきました。

式や表、図をつかって説明するなど、数学科には数学独自の言語活動があります。こうした言語活動をうまく機能させて、子どもたちの学習を活発にすることが大切です。

そのためには、「日常生活のなかの課題を数学の課題として取り出す力」や「得られた結果の妥当性や確かさを検証する力」を身に付けさせるような授業づくりをめざすとよいことを教えていただきました。



ねらい設定上の留意点

また、授業開始5分で、子どもの立場にそったねらいを教室で共有することの大切さについて述べられました。例えば、「方程式を使って問題を解く」と教師が板書したものを、ノートに写すだけでは、ねらいにならないという

ことです。子ども自身がこれまでの経験や知識・技能を使って解決する見通しをもったとき、初めてその授業における子どもの立場にそったねらいが生まれます。先生が提供するねらいと子どもがもつねらいとを一致させることの大切さについて教えていただきました。

中学校理科

曖昧な知識や憶測に頼らず、客観的事実を積み上げ真理に迫る

4つの枠組み

藤本調査官からは、理科の調査問題には、「適用」、「分析・解釈」、「構想」、「検証・改善」の枠組みがあることを紹介されました。

例えば、「構想」の問題では、自然の事物・現象から課題を設定したり、予想や仮説を立てたり、観察・実験を計画したりする力が問われます。

こうした問いに的確に答えるためには、日々の授業において、観察・実験の目的に即して要因や条件を考えさせることが大切です。



また、観察・実験の結果を分析し解釈する場面では、話し合い活動を単に活性化させるだけではなく、質の高い討論や議論ができるように指導することが重要です。実験の結果という客観的事実に立脚した分析や発言を心がけさせること、自分の考察と友達の考察とを比較したり関係付けたりすることで共通点や差異に着目させることなどにより、新たな科学的概念の獲得につなげていく授業づくりが大切であると述べられました。

客観的事実

曖昧な知識や憶測に頼るのではなく、客観的事実を積み上げながら真理にたどり着くことに喜びを感じる生徒を育てるためにも、授業における言語活動の充実努めましょう。

・ B問題で求められているような「知識・技能を活用して、思考、判断、表現する力」は、質の高い課題解決学習や言語活動によって育てることができます。授業改善をとおして、魅力ある授業を提供しましょう。

・ 各学校では、この協議会へ参加された先生から復伝が行われていることと思います。全国学力・学習状況調査の結果分析に、今回の協議会で得た授業づくりの視点を取り入れ、各学校において適切な言語活動が展開されるよう研修を深めてください。

